

# 言語の「かのように」性について

—能力としての代換—\*

田中太一

t.tanaka6002@gmail.com

キーワード：「かのように」性 代換 カテゴリー化 コミュニケーション 認知言語学

## 要旨

認知言語学が採用する、いわゆる「捉え方の意味論」では、言語表現の意味はその指示対象のみによって決まるのではなく、概念化の主体の捉え方を反映したものであると考える。この意味観のもとで、たとえば「駅前に町の主だった建物があつまっている」のような例はどのように分析できるだろうか。この文を発話する際には通常、建物が実際に移動しているということではなく、建物が駅前という空間的に狭い範囲に集中して存在しているという程度の内容が意図されている。つまり、話し手は建物が移動していないということを知りながら、あたかも移動している「かのように」表現し、聞き手は話し手の意図したとおりにその発話を理解することができているのである。言語によって直接に表すことができる内容は伝えようと意図したことの一部に留まるといって話し手・聞き手の共有知識はコミュニケーションの基盤となっている。本稿では佐藤 (1986, 1987) を援用し、言語が持つこのような性質（「かのように」性）を「能力としての代換」という全体像に位置づける。

## 1. はじめに

認知言語学では、言語表現の意味は指示対象に尽きるのではなく、概念化の主体の捉え方もまた意味の重要な側面であると考えられる。このことは、たとえば (1)・(2) のようにまとめられる<sup>1</sup>。以下で論じる「かのように」性は、特に (1) に関わるものである。

- (1) **異なる対象に同じ捉え方を適用して捉えることが、異なる対象に同じ言語表現を適用することが可能になる仕組みの1つである。** (本多 2016: 264)
- (2) **同じ対象に異なる捉え方を適用して捉えることが、同じ対象に異なる言語表現を適用することが可能になる仕組みの1つである。** (本多 2016: 266)

---

\* 本稿は日本言語学会第 162 回大会 (2021 年 6 月、オンライン開催) で行われたワークショップ、「「かのように」語ることばたち：伝え方の意味論に向けて」における口頭発表「「かのように」の見えづらさから見えてくるもの」を発展させたものである。さまざまな仕方でワークショップに関わってくださった皆様に感謝したい。とりわけ、西村義樹先生、野村益寛先生には、発表の準備段階から、いくつもの重要なご指摘をいただき、議論をより明確なものとする事ができた。

<sup>1</sup> 筆者は、(1)・(2) における異なる対象・同じ対象の位置づけについて、本多 (2016) とは異なる立場をとっている。詳細は、第 4 節および、田中 (2020: 注 6) を参照されたい。

国広 (1985:8) は (3) などの例を、「客観的に見れば物の動きはあり得ないのに、あたかも動いたかのように捉えている」表現として分析し、このような捉え方に「痕跡的認知」という名称を与えている。ここで問題になるのは、「あたかも動いたかのように」ということの内実である。

(3) 駅前に町の主だった建物があつまっている。 (国広 1985: 10)

(3) は、別の場所に存在していた「町の主だった建物」が駅前に実際に移動した場合（すなわち、異なる対象）であっても用いることができるため、(1) の適用事例と見なすことができる<sup>2</sup>。つまり、(3) の話し手は、実際には移動が生じたわけではないということを踏まえつつ、移動が生じたかのように捉え、聞き手に伝えているということである。もちろん聞き手はその際、(通常は) 移動が実際に生じたとは考えず、建物の空間的配置を話し手の意図した通りに理解することができる。とはいえ、移動が生じていないということを意味の一部としつつ、移動が生じているかのように捉え、伝えるというのは、あからさまな矛盾のようにも感じられる。本稿では、このような「かのように」捉え・伝える過程がどのようなものか、および、それが通常（研究者にとっても）意識されづらいのはなぜかを検討したのち、能力としての代換という全体像に位置づける。

## 2. コミュニケーションにおける「かのように」

本稿では、言語によるコミュニケーションを、話し手が言語的・非言語的の手がかりを提示することで聞き手の注意を意図した対象へと向ける過程として規定する<sup>3</sup>。その際、対象は手がかりによってカテゴリー化されている。つまり、話し手は聞き手に対し、手がかりによってカテゴリー化される対象へと注意を向けるように指示しているのである (Langacker 2000, 2016, 2020, Scott-Phillips 2014)<sup>4</sup>。この過程は、たとえば次のようなものである。ペットのタマを指差して (4) のように発話する場合、話し手は (通常指差しを伴う) 「あの猫」という手がかりによって (猫としてカテゴリー化できる) 特定の対象 (タマ) に聞き手の注意を向け、更に「(あの猫は) うちのペットだ」という手がかりによって、当の猫が話し手のペットであるという (カテゴリー化の元で把握される) 事態へと聞き手の注意を向けている。

<sup>2</sup> この場合の「あつまっている」はたとえば、「駅前に野次馬があつまっている」におけるものと同様の意味で用いられていると考えられる。

<sup>3</sup> 代表的な非言語的の手がかりとして、視線や指差しが挙げられる。

<sup>4</sup> 正確に言えば、手がかりへと注意を向けるように指示してもいいことになる。もしそうでなければ、聞き手が手がかりに注意を向けることが保証されず、安定したコミュニケーションは困難になってしまうだろう。とはいえここには、その (手がかりへと注意を向ける) 指示のためには (手がかりへと注意を向ける指示を行うため) 更なる手がかりが必要であり、更にその手がかりに注意を向けるためには更なる手がかりが必要となる… というふうな、結局のところ無限の手がかりが必要になってしまうという問題がある。コミュニケーションが現に可能である以上は、この後退は何らかの仕方で解消されているはずである。この課題への対処法としてさまざまな議論が提出されている。詳細は三木 (2019) を参照されたい。

(4) あの猫はうちのペットだ。

ここで重要なのは、話し手が聞き手の注意を向けようと意図した対象は、手がかり以上の細部を含むということである。タマはもちろん猫カテゴリーの一員ではあるが、「猫」の慣習化した意味以上の具体的な細部を持つ<sup>5</sup>。このことを野矢 (2011: 第 23 章) は、典型例にかんする通念としての「典型的な物語」という概念を用いて巧みに表現している。たとえば、野矢は鳥の典型的な物語について次のように述べる。

- (5) ふつうの森ないし水辺に生息しているか、あるいはふつうの人にふつうに飼われていたりするだろう。ふつうの動物園にもいる。ふつうの焼鳥屋でふつうに変わり果てた姿となり、ふつうのおじさんの腹におさまっていきもする。それは図鑑の中の鳥の姿などではなく、むしろ鳥にまつわるきわめて多様な通念の全体と言うべきである。(野矢 2011: 411)

タマはあらゆる点で「ふつう」の猫であるわけではない。さらに言えば、あらゆる点で「ふつう」である対象など実在しないと考えるべきだろう。「現実はつねに、典型的な物語をはみ出している」(野矢 2011: 405) ののである<sup>6</sup>。コミュニケーションにおいて提示される(言語的)手がかりは、それによってカテゴリー化される対象の属する「典型的な物語」、すなわち、その相貌を決定づける主要因である。これはつまり、対象はその相貌を持つものとして捉えられるということである。たとえば(4)であれば、そこに存在する対象は「猫」の相貌を持って、言い換えれば「猫」として立ち現れる。このことは、一見分かりづらいが、(6)との対比によってはっきりと理解することができる。

(6) あの哺乳類はうちのペットだ。

ペットのタマに、「(あの) 哺乳類」という手がかりによって聞き手の注意を向けるということは、対象(タマ)を「哺乳類」の相貌を持つものとして提示するということである。普通の猫が「哺乳類」として提示されることはあまりない。それは、「猫」という、より対象との一致度が高い相貌をもたらす手がかりが存在するからである。「猫」は「哺乳類」と比べて相対的に

<sup>5</sup> ただし、以降の議論から明らかのように、これはあくまで、記号(この場合は猫)の意味は慣習化されたものに固定されているという(おそらくは常識的な)立場からの記述であり、実際には、手がかりとなるカテゴリー自体が、それによって注意を向けられる対象に応じて変化することになる。さらに言えば、対象のあり方もまた、手がかりによって変質している(これはたとえば、非典型的なペットである「蛇」が、ペットという手がかりと慣習的に結びつくことによって、ペットとしての相貌を獲得していく過程として実現する)。

<sup>6</sup> 池上 (2021: 209) が「生の体験が縮約の運動を破壊し、それが機械的な認知を生命的な認知へと押し上げる」と述べるのも、この点を捉えたものだと考えられる。カテゴリー化を通じて世界を馴染みのあるものへと構成する過程は、ヒトの活動の不可欠な側面である。その一方で、世界には既存のカテゴリー化に収まらない(すくなくとも、予め収まっているわけではない)細部が存在することもまた、私(たち)は知っており、そのことがカテゴリー化の動性、ひいては生命の動性を支えているのである。

ットのタマに近い<sup>7</sup>。とはいえ、タマ（の持つさまざまな特徴）は「猫」としての相貌に尽きるわけではないという点が重要である。

ここには「かのように」性が非常に見えづらい形で存在している。すなわち、ペットのタマには「猫」や「哺乳類」の（慣習化した）意味に収まりきれない細部が存在するにも関わらず、あくまで「猫」や「哺乳類」である「かのように」提示されているのである。このような意味では、ほぼ全ての発話が「かのように」性を持つことになる。しかしながら、大部分の手がかりについて「かのように」提示されたものだ意識されることは稀である。コミュニケーションにおいては、手がかりが対象へと適切に注意を向けられるものとして提示されること自体が慣習化している。そのため、話し手は、対象が手がかりによって適切にカテゴリー化される（適切な相貌を与えられる）ということを伝えると同時に、手がかりが対象を適切にカテゴリー化しようということもまた伝えることになるのである（Langacker 2000）<sup>8</sup>。このことは、言語の使用がその使用の適切さを示す事例の存在からも確かめられる。たとえば「背が高いってどういうこと？」という問いかけに対し「太郎は背が高いよ」と答えることができる。これは、太郎自身に関する叙述であるとともに、「(背が) 高い」という述語の適切な使用を示すものでもあり、やり取りを通じて聞き手は自身の「高い」にかんする知識を更新することができるのである（Ludlow 2014）<sup>9</sup>。手がかりは対象をカテゴリー化することを通じて、自身の意味を変化させていく<sup>10</sup>。「かのように」語っていることが見えづらくなる要因の一つは、発話によって提示された手がかりと、話し手の意図した対象との間で相互調整が行われ、ずれが縮小されることにあ

### 3. カテゴリーの中心と周縁

「かのように」性は通常、カテゴリーの周縁例を中心例であるかのように提示する過程として実現する。多くのカテゴリーは、典型性の異なるメンバーによって構成されている。たとえば、スズメやツバメは鳥カテゴリーの典型的（中心的）メンバーだが、ペンギンやダチョウは非典型的（周縁的）メンバーである。私（たち）はカテゴリーの構成そのものを主題としたコミュニケーションを行うことがある。これは、「典型的な物語」の明示的調整だと考えられる。坂原（2002）はカテゴリー内での差異（あるいはその否定）を表現するものとして、(7) のような差

<sup>7</sup> もちろん、タマが猫であることを理解している人は、通常は（「猫」の慣習化した意味を習得していると考えられるため）同時にタマが哺乳類であることを理解している人でもある。そのため、「猫」という手がかりによってタマが指示された場合であっても、そこには哺乳類の相貌が伴っていると考えられることはできる。ただし、私たちは多くの場合、猫に対する接し方は知っていても哺乳類に対する接し方は（少なくともあまり）知らないだろう。対象が哺乳類であることが分かったとしても、（獣医など動物の専門家でもない限り）それをどう扱ったら良いのか分からないのである。その点でやはり、タマが「猫」としてカテゴリー化された場合には、哺乳類としての相貌は（ひとまず）抑制されていると考えられる。

<sup>8</sup> 言語記号などの手がかりが、対象を適切にカテゴリー化できるものとして提示されるという慣習がなければ、私（たち）は言語を習得することが不可能になってしまうだろう（cf. Langacker 2010）。

<sup>9</sup> この例では、高いと見なすために必要な高さを示す場合が典型的な使用であると思われる。ただし、実際に使用される機会は少ないとはいえ、そもそも高いとはどのような性質なのか（たとえばたいとはどのように違うのか）を示すことも可能である。

<sup>10</sup> もちろん、この過程は話し手・聞き手の知識において生じるものである。

異化トートロジと、(8)のような同質化トートロジを挙げている。(7)では、ネコであるための基準として、ネズミを捕ることを(新たに)提案しているのに対し、(8)では、そのような基準による分断を退け、あくまで一つのカテゴリーを均質に扱おうと提案するものと分析される。鳥について同じことを述べるならば、(9)・(10)のようになるだろう。(9)は飛ぶことを基準に、ダチョウやペンギンを鳥カテゴリーから排除する差異化トートロジであり、(10)はそのような基準を退け、ダチョウやペンギンであっても鳥カテゴリーの一員と見なす同質化トートロジである。

(7) ネズミを捕ってこそ、ネコはネコだ。 (坂原 2002: 112)

(8) ネズミを捕らなくても、ネコはネコだ。 (坂原 2002: 113)

(9) 飛んでこそ、鳥は鳥だ。

(10) 飛ばなくても、鳥は鳥だ。

私(たち)は現に、ダチョウやペンギンを鳥と見なすカテゴリーを習得している。たとえば、ある動物園にかんするクイズとして、「この動物園に鳥は何羽いるでしょう」と問われたとしたら、典型的な鳥だけでなく、非典型的な鳥も数えることになるだろう。しかしこのことは、当然のことながら、典型例と非典型例の区別を否定するものではない。「ペットに鳥を飼っています」と(だけ)説明した人が、ダチョウやペンギンを飼っているということを伝えようとしていたことが判明したとしたら、その説明は(間違いとは言わないまでも)不適切だとみなされるだろう。では、非典型例をカテゴリーの一員と見なすとき、私(たち)は何を行っているのだろうか。カテゴリーは一般に、「典型的な物語」を共通の枠組みとして、そこに含まれる要素が相互に結びつくことによって構成される。非典型例は、物語の一部を非典型的なもの置き換えることで、適切に位置づけることができる。ダチョウやペンギンを「飛ばない」という仕方特徴づけることが有意味であるのは、一度は鳥の「典型的な物語」に位置づけた上で、そこからのずれを欠如として捉えているからに他ならない<sup>11,12</sup>。すなわちここには、典型例と同じく「典型的な物語」に当てはまるかのように捉えつつ、そこからの逸脱を把握する過程が存在するのである。

(11)についても同様に考えることができる。「あつまる」の典型例は、対象の移動を含むものである。この例は、建物が実際に移動しているのではないという点で非典型的な「あつまる」の事例であり、「典型的な物語」からの逸脱が生じていると言える。このように、非典型例をカテゴリー化する際には、典型例であるかのようにカテゴリー化し、さらにそこからのずれを把

<sup>11</sup> たとえば、パソコンや水差しも飛ぶことはないが、飛ばないという仕方特徴づけることが有意味である状況は少ないのは、これらの「典型的な物語」に飛ぶことが含まれておらず、そこに欠如を見出すことができないからだと考えられる。「飛ばない鳥」が自然であるのに対し、「泳がない鳥」が(多くの場合に)不自然であるのも同様の理由による。

<sup>12</sup> もちろん、「典型的な物語」からのずれは欠如としてのみ捉えられるわけではない。例えばダチョウであれば陸上を高速で移動すること、ペンギンであれば水中を泳ぐことという肯定的性質が、それぞれ鳥の「典型的な物語」における(飛ぶことを含む)移動様態と置き換えられている。

握する過程が存在する。この過程が全体として慣習化している場合に、「かのように」性が見えづらくなるのである<sup>13,14</sup>。

(11) = (3) 駅前に町の主だった建物があつまっている。 (国広 1985: 10)

#### 4. 私たちには何が「見え」ているのか

本多 (2005: 5.6.3) は、次のような例を図と地の反転と見なす分析を批判している。その理由は、「これらの例を図と地の反転の例と考えることは、「それぞれのペアにおいて話し手はどちらの文でも状況を同じ視座から見ている」および「どの例においても話し手の姿が話し手自身の視野の中に含まれている」と考えることになる」(本多 2005: 110) というものである。たしかに、(12)・(14) では話し手たちが明示的に表現され注意の対象となっているのに対し、(13)・(15) では主体的に捉えられ注意の対象とはなっていない。「見え」には客体として捉えられている対象のみが含まれると規定する限りにおいて、本多 (2005) の批判は正しいと言える。

(12) We can handle this car smoothly. (本多 2005: 110)

(13) This car handles smoothly. (本多 2005: 110)

(14) We are approaching Kyoto. (本多 2005: 110)

(15) Kyoto is approaching. (本多 2005: 110)

本多 (2005: 25) は生態心理学の知見を踏まえ「言語において、音形をもった形式によって表現できるのは、話し手の視野の中に含まれるものに限られる」と述べている。この主張を受け入れたうえで、問題になるのは「視野の中に含まれている」ということの内実である。(16) が事態の直接的知覚に基づいて発話された場合、話し手に見えているのは、机のある面と本のある面および両者の関係であろう。机にせよ本にせよ、一度に見ることのできる面は限られており、一方が他方の「上にある」という関係もまた不完全にしか知覚されていないことになる。このことを言語によって正確に報告しようとするならば、(17) を基盤として、見える限りの情報を付け加えたものを発話することになるだろう。

(16) 机の上に本がある。

(17) ある具体的な輪郭とある具体的な輪郭がある関係を具体化している。

もちろん、私 (たち) は普通、机の上に本があるということを伝える際に (17) のように発

<sup>13</sup> 具体的な言語表現としては新奇であっても、スキーマの水準 (e.g. [建造物] が [移動] している) では慣習化している場合もありうる。

<sup>14</sup> たとえば、創造的な隠喩では、ずれの解消を新たに行う必要があるため「かのように」性ははっきりと見て取れる形で提示される。

話し手はしない。机は机として、本は本として、「上にある」は「上にある」として端的に知覚されている。このことが可能であるためには、ある視座からの「見え」には、別の視座からの「見え」が組み込まれるのでなければならない。私（たち）に直接見えるのは机の特定の面だけである。しかし、この面は、(想定された)別の視座から得られた様々な面と統合され、机の像を結んでいる。すなわち、私（たち）は何物でもないものの面ではなく、机の面を見ているのであり、さらに言えば、机を見ているのである。この際には、それぞれの視座の位置関係を把握することが不可欠である。視座同士の位置関係が把握されなければ、複数の視座からの見えが与えられたとしても、対象を一つの像として統合することができず、独立の見えが立ち並ぶだけになってしまう。話し手が実際にとっている視座は、他の視座を位置づける基盤になるという点で特別なものであることは疑い得ない。しかしながら、同様の事情は他の視座にも潜在的には成り立っており、その意味で実際の視座もまた無数の可能な視座の内の一つとしても位置づけられているのでなければならないのである<sup>15</sup>。

ここで (14)・(15) を例に、図と地の問題について再び考えてみたい。(14) の話し手が、同じ状況を (15) としても表現できると知っているのであれば、どちらを発話するか選択することが可能である。その際には、自身が見えに含まれる (14) と含まれない (15) との両方を含んだ全体としての見えのなかで、どこを焦点とするかを選択することになる<sup>16</sup>。これは、図と地の反転（より正確には、共通の地における図の選択）と言って良い関係にあると考えられる。本多 (2005: 112) は、このような想定を、「話し手の言語知識の中に、分析者であるわれわれが占めるべき位置が確保されていると考えるのは不自然な想定である」として退けている。これはつまり、(14) と (15) を一挙に見渡す視座は当の話し手には与えられていないにも関わらず、分析者の視座からは、いずれの場合も話し手は同一の視座から事態を把握しているように見えるために、両者を混同してしまっているということであろう。しかしながら、(14) と (15) のいずれかを選択する過程は、言語使用を外側から観察する分析者のものではなく、まさに話し手自身のものである<sup>17</sup>。本多 (2005) の立場からも、この点は何らかの仕方で捉えなければならないだろう。このように考えるならば、残るのは、「見え」によって意味することの範囲に何を含めるかという用語法上の問題に過ぎないように思われる<sup>18</sup>。

<sup>15</sup> 一人称代名詞としての「私」を使用できるのは、この私（筆者である田中）だけではなく、どの人物であっても本人自身を指す語として使用できるのもこのためである。ここには、この私こそが、他者とはまったく異なるあり方をした唯一の存在であるにも関わらず、その唯一性は他者にも妥当する概念的内容としてしか言語化し得ない（すなわち、「この目からのみ現実に見え、この体だけが現実に痛み」などと言ったところで、「この」（や「現実」に）がどの人物にも当てはまるように相対化されてしまう）という不思議な構造が成立している。永井 (2016) は「今」にも同様の問題を見出し、詳細な議論を展開している。

<sup>16</sup> ここでの「全体としての見え」は、本多 (2005) の用語法ではなく、あくまで本稿でのものである。

<sup>17</sup> 本多 (2005: 111f) がここで直接検討しているのは以下の例である。とはいえ、これらは「同様の問題をはらむ分析」を検討するために挙げられているため、(14)・(15) の図地分析への批判と考えて差し支えない。

- |                                  |                                     |
|----------------------------------|-------------------------------------|
| (a) He opened the door.          | (Langacker 1991: 335, 本多 2005: 111) |
| (b) The door opened very easily. | (Langacker 1991: 335, 本多 2005: 111) |
| (c) The door suddenly opened.    | (Langacker 1991: 335, 本多 2005: 111) |
| (d) The door was opened.         | (Langacker 1991: 335, 本多 2005: 111) |

<sup>18</sup> 言うまでもないことではあるが、図と地という用語を、本多の用語法での見えにおける区別に限定して用いること自体に問題があるわけではない（それどころか、これは極めて正当な用語法でありうる）。

(15) は、それ自体は移動することのない京都が「知覚者の移動に伴って、知覚者の視野においては移動するものとして立ち現れる」(本多 2005: 265) ことを表す文である。ここでは、(通常は) 京都が実際に移動しているのではないということもまた聞き手に理解されなければ、話し手の意図は達成されないという点に注意しなければならない。たしかに話し手自身の視野において京都は移動している。しかしそれはあくまでも話し手の経験において生じた事態であり、世界における公共的な事態ではない。期待される聞き手の理解は「話し手は移動しており、それにより京都が移動するという視覚的経験をj得ている」という程度のものである。このことを、本多 (2005: 26) は、エコロジカル・セルフのレベルで捉えられた話し手が「ゼロ形として表現されている」と分析している<sup>19</sup>。(15) は話し手自身の視座が移動していることを意味に含んでいるため、たとえば「今どの辺りにいるの?」という問いかけへの返答として用いることができる。その場合、話し手が聞き手に伝えようとしているのは、話し手の現在地であり、そのことの手がかりとして京都が近づいてきたという見えを提示しているのである。また、(15) は(現実には考えづらいことではあるが、) 京都が何らかの意味で実際に移動している場合にも用いることができる。たとえば、大規模な地殻変動によって京都を構成する土地が実際に移動している場合や、京都府の行政区分上の範囲が拡大し続ける場合などには、話し手の視座は固定されたまま、京都の移動が経験されることになる。聞き手はこうした様々な状況や、(14) との視座の違いを踏まえて (15) を理解することになる<sup>20</sup>。手がかりとしての言語表現はあくまで見えの一部を焦点化しているのであって、その背後には見えの全体が(程度の差はあれ) 潜んでいる。つまり、見えの全体を踏まえた上で、焦点化された部分によって対象をカテゴリー化しているかのように提示しているのである。

## 5. 「能力としての比喩」と「彩としての比喩」

以下では、ここまで見てきた、コミュニケーションにおける「かのように」性が「能力としての代換」の現れであることを明らかにする。代換の検討に入る前に、まず本節では、森 (2001) による「能力としての比喩」と「彩としての比喩」という区別を確認したい。

森 (2001) は逸脱表現と、その基盤となる認知能力を明示的に区別することを提案している。(18) は提喩にかんする整理であり、(19) は換喩にかんする整理である<sup>21,22</sup>。

<sup>19</sup> 本多 (2005: 13) はエコロジカル・セルフについて、「環境の知覚と自己の知覚は相補的であり、世界を知覚することは、同時に自己を知覚することなのである」と説明している。

<sup>20</sup> もっとも、地殻変動などの表現される可能性が極めて低い事例は、多くの場合に実質的な考慮の対象とはならないと思われる。重要なのは、私(たち)が異なる視座からのものを含めた複数の見えを見渡しているという点である。

<sup>21</sup> 隠喩については、「すべて隠喩能力が働いた結果、彩としての隠喩が成立する」(森 2001: 93) と述べられている。これはつまり、隠喩の場合には隠喩能力を基盤とする通常表現は存在しないと考えられていることであろう。事実、森 (2001: 93) は次のような「一見隠喩とは気づきにくい」例を挙げ、「[汲む][そそぐ][中略]」といった表現は本来液体について用いられる言葉で、それが転化して感情を表す表現になったことは、よく考えて見ればはつきりしている」と主張している。

(e) 相手の気持ちを汲む

(森 2001: 94)

(f) 愛情をそそぐ

(森 2001: 94)

<sup>22</sup> 筆者は、森 (2001) の議論を細部まで受け入れているわけではない。とはいえ、「能力としての比喩」と「彩

- (18) 我々には言葉のタクソノミーを上下させて、物事を示す(認識する)「提喩能力」があり、その能力のもとで通常の言語から逸脱したときに彩としての「提喩」が生じる

(森 2001: 98)

- (19) さまざまな段階の「全体一部分」関係のどこに焦点をあてるかという「換喩能力」があり、その段階のなかで通常の使用域から逸脱した場合に「彩としての換喩」が発生する

(森 2001: 95)<sup>23</sup>

このような整理によって、たとえば、(20) や (21) のような例は換喩か否かという、しばしば議論の対象となる問題にたいして、(20) では、回るのは風車の全体ではなく翼の部分であり、(21) では、曇るのはメガネの全体ではなくレンズの部分であるという点で、換喩能力の反映ではあるが、一方でどちらも逸脱性を持たない通常表現であるという点で彩としての換喩ではないという診断を下すことができる。これらが換喩だと主張する論者は換喩能力を基準にしていたのであり、換喩ではないと主張する論者は逸脱表現(すなわち、彩)かどうかを基準にしていたというわけである。

- (20) 風車が回っている。 (瀬戸 1997: 169)

- (21) メガネが曇った。 (瀬戸 1997: 169)

森 (2001) が導入した区別は、比喩研究において生じるこうした(不毛な)論争を調停する強力な道具立てだと言えるだろう。

## 6. 能力としての代換

本節の主題は、彩としての代換および、その基盤となる能力としての代換である。彩としての代換とは、たとえば次のようなものである。(22) は、平常表現である(23) に対して代換として機能している。この2つの文について、佐藤 (1986: 304) は「文の意味ははっきりちがうけれどもあらわされている事態は奇妙に関連し合っている」と述べている。

- (22) 金棒には鬼が不可欠であった。 (佐藤 1986: 304)

- (23) 鬼には金棒が不可欠であった。 (佐藤 1986: 304)

他にも代換の例として、次のようなものが挙げられている。(24) と (25)、(26) と (27) はそれぞれ代換関係にあるとされる。

---

としての比喩」の区別が極めて重要であることは疑いようがない。

<sup>23</sup> この整理はあくまで「全体一部分」関係に基づく換喩にかんするものとして提示されており、換喩の全範囲を捉えることを意図したものではないという点に注意されたい。

- (24) 弁慶はつねに御曹子のそばにいた。 (佐藤 1986: 304)  
(25) 御曹子はつねに弁慶のそばにいた。 (佐藤 1986: 304)  
(26) 京都の夜 (佐藤 1986: 305)  
(27) 夜の京都 (佐藤 1986: 305)

彩としての代換は、一般には (28) のように規定される統語的關係に基づくレトリックである。

- (28) 語 (句) が平常表現で占める統語上の位置とは異なる統語上の位置を占める表現。  
(松尾 2006: 103)

ここで注意すべきは、佐藤 (1987: 52f.) が指摘するように、代換はあくまでも語句同士の意味的な關係に関わるものであり、その (線条的な) 位置に関わるものではないという点である<sup>24</sup>。そのため、(28) における「統語上の位置」もあくまで文法關係などの意味的な關係 (やその標示) に関わるものと考えなければならない。

また、(28) には「平常表現」との比較が含まれている点も重要である。平常表現とはもちろん、代換に対しての平常表現である。したがって代換は平常表現と何らかの意味で同じ (あるいは、少なくとも類似した) 事態を表すものと考えられる。ただし、複数の統語的關係の内、いずれが「平常表現」なのか、あるいはまた対応する平常表現など存在するのかという問は容易に答えられるものではない。佐藤 (1987:60-63) はこの点を巡る諸説を整理した上で、「一言語内のふたつの逆の表現の、どちらが代換であるかを特定することは、さしあたってできなくてもいい。今の私たちの問題にとって肝心なのはそこにどういう差異が生じているかということだ。その差から、少なくとも両表現のどちらかに代換が存在するということさえ確認できれば、代換の本質は検討できる」(佐藤 1987: 63f.) とまとめている。実際、佐藤 (1986: 第 10 章) においては、平常表現との比較によって見出される代換ではなく、(29) のように、同一の「現実」を表す際に、同一の語彙項目の文法關係を様々に変化させることとしての代換が中心的に論じられている。

- (29) 統語的組織化の随意性は、たんに主格と対格の逆転だけを可能にするだけではない。  
ある現実を組織化する一ものがたり化する一ために選抜された複数の項目たち相互の (広義の) 《格》關係の網を模様替えするのである。その多元的な変様をさして、きわめて広い意味での《代換》現象と呼ぶことができる。  
(佐藤 1986: 331)

<sup>24</sup> 位置を入れ替えるレトリックは「転置」と呼ばれる (佐藤 1987: 53)。

このような規定のもとで検討されるのは、たとえば次のような文である。能動文である (30) と、受身文である (31) は、同一の語彙項目 (より正確には、内容語) を能動文と受身文の形で用いることで同一の現実を表している (いずれの場合も、「桃太郎」が攻撃者で「鬼が島」が攻撃対象であるという関係が成立している)。とはいえ、これらの表現を何らかの平常表現に対応する逸脱表現とみなすことは困難であろう。森 (2001) による整理を借りるならば、(29) は能力としての代換を基盤としてはいるが、彩としての代換ではないと考えられる。

(30) 桃太郎が鬼が島を攻撃した。 (佐藤 1986: 304)

(31) 鬼が島が桃太郎に攻撃された。 (佐藤 1986: 304)

このような観点から、あらためて (22)・(23) を見返してみると、鬼と金棒の間に成立する不即不離の関係が共通して捉えられており、それが能動文と受身文という意味役割と文法関係の対応が異なる文によって表されているということから、このような能力としての代換が彩としての代換においても働いていることが確認できる。

ここで、(29) における「ある現実」の内実について考えてみたい。(22) と (23) は同一の事態を表しているようにも感じられるが、一方が成り立てば必ずもう一方も成り立ち、一方が成り立たなければ必ずもう一方も成り立たないという関係にはないだろう。この事情がより見て取りやすい例として、佐藤 (1986: 305) が代換の事例として挙げる (32)・(33) を検討する。佐藤 (1986: 305) はこの例について「事態はそれぞれにずいぶんちがっている」と述べている。

(32) 弁慶はつねに御曹子を護っていた。 (佐藤 1986: 305)

(33) 御曹子はつねに弁慶を護っていた。 (佐藤 1986: 305)

いわゆる真理条件の点では、(32) と (33) ははっきりと異なる (たとえば、弁慶はつねに御曹子を護っているが、御曹子は一度も弁慶を護ったことがないという事態はまったく問題なく成立する)。そのため、組織化の対象である「ある現実」を (32) と (33) が共有する真理条件によって規定することは (そのような真理条件が存在しないのだから) 不可能である。

佐藤 (1986: 323) は図 1 を挙げ、「ある現実」に対応する「生の現実」(A) を表す内容語群 (B) からなる複数の表現 (C, D, E, F) について、「C の構造の文を読むとはそれが D でも E でも F でもありえたはずだということを読みとる作業にほかならぬ」と論じている。さらにまた、「A とはじつは「生の現実」ではなく C から F にいたる統語的変異を成立させる条件にほかならぬ、と言いかえたほうがいいかもしれない。それは統語的ヴァリエーションから造形される結果と呼んでもいいし、統語的ヴァリエーションを生み出す原因と呼んでもいいような (どちらの呼びかたも不正確な) 虚の現実である」(佐藤 1986: 324) とも述べられている<sup>25</sup>。つまり、

<sup>25</sup> Langacker (2020: 30) による「記述対象は概念構造であり、言語構造それ自体ではないとはいえ、習慣的な言語使用や、使われそうな言語表現の先読みが、その形成において小さくない影響を及ぼすことは避けがたい」

(29) における「ある現実」は、様々な言語表現の動機となると同時に、そのような複数の言語化の可能性を通じて把握される対象でもあるのである。

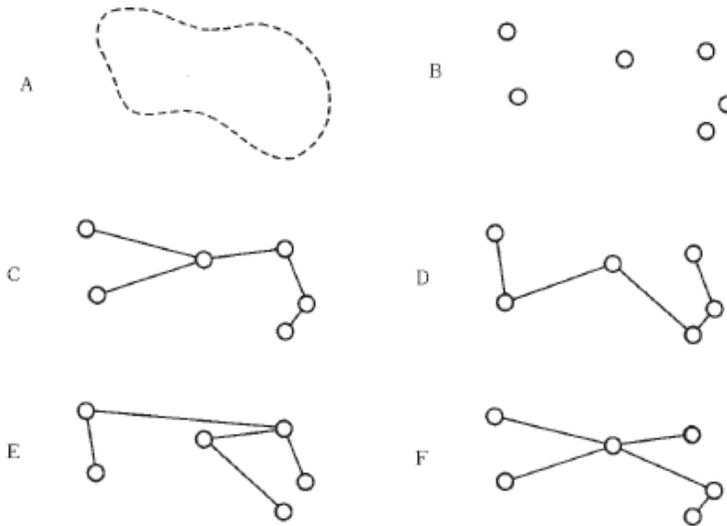


図 1 選抜 (佐藤 1986: 320)

代換では通常、(28)・(29) から分かるように、用いられる内容語は一定であることが前提とされている。もちろん、彩としての代換であれば、このような限定は（他の彩との区別という点で）正当化されうる。しかし、能力としての代換という点から考えてみると、一定の内容語を様々な文法関係へと組み替えるという規定は、さほど重要ではないように思われる。A を表しうる B（内容語群）は複数（というより無限に）存在するのだから、ある B からなる表現の背後には、B', B'', B'''……という選択されなかった内容語群が控えているはずである<sup>26</sup>。さらに、A は必ずしも事態である必要はなく、（潜在的に）事態を構成する個体であっても良い。これらの点を踏まえて、(29) をさらに一般化すると (34) という代換能力が導かれる。

- (34) 能力としての代換：ある事物を、異なるカテゴリー化・言語化の可能性を踏まえつつカテゴリー化・言語化する能力（その際、当の事物が無数のカテゴリー化・言語化可能性の根拠として要請される）。

これは、佐藤 (1986: 353) の「「太郎が花子に《売った》」＝「花子が太郎から《買った》」という変異のばあいのように、《代換》現象がすでに語彙内で意味化されているばあいには、語彙単

という指摘も、この関係を捉えたものと言えるだろう。

<sup>26</sup> 佐藤 (1986: 319) は、まず内容語語群を選択し、その後統語的な組み立てが生じるという順序は「便宜上の筋書きにすぎない」と述べている。

位の入れ換えをも考慮に入れるべきだ」という指摘を敷衍したものとして位置づけられる。

言語表現には、ある事態に含まれる全てを同時に描写することはできない。描かれるのは常に事態の一側面であり、そうであることもまた私（たち）の知識となっている。ここまでくれば、本稿で検討してきた「かのように」性が（34）に示した能力としての代換を反映したものであることはもはや明らかであろう。

## 7. おわりに

本稿では、さまざまな「かのように」性の内実を分析し、さらに、それが能力としての代換に基盤を持つことを明らかにした。その際、検討した事例は全て、話し手と聞き手で同一の理解に達するものであった。しかし、「かのように」性、すなわち代換能力の働きはそれにとどまるものではない。

（35）を発話する際、話し手は、家財道具の焼失（あるいは空襲によって家財道具が焼けることの全体）というコントロール不可能な事態が自らの責任で生じたかのように語っている。

（35） 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。 (井上 1976: 66)

（外形上）同じ事態は（36）によっても表現することができる。すなわち、（35）を発話する際には、（多くの場合）可能な言語化の候補として（36）が把握されていると考えられる<sup>27</sup>。（35）では、話し手が家財道具の焼失に対して心底責任を感じている場合であっても、その責任が聞き手自身の視座から焦点化されることまでは意図していないことがありうる。その場合には聞き手に（37）のように返答されたら、反論はできないものの釈然としない気分になるだろう。話し手は、自身の視座からは（35）が焦点化され、聞き手の視座からは（36）が焦点化されるということの全体に聞き手の注意を向けようとしていたのである。

（36） 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼かれてしまった。

（37） そうですか。あなたたちは空襲で家財道具をみんな焼いてしまったんですね。

このようなことが可能になるのは、コミュニケーションにはもともと、話し手・聞き手が互いの視座を把握し、見えの内容について調整しあう（ことによって、場合によっては視座そのものの調整を行う）過程が含まれているからであろう。一つの視座から焦点化されたことがらを表現することによって、別の視座からの焦点化をも表現するという点で、このようなコミュニケーションも「かのように」性を持つことになる。

私（たち）が聞き手の注意を向けようとして意図する対象のすべてに対応する手がかりが予め用意されているわけではない。コミュニケーションでは基本的に、伝えたいことのごく一部を言

<sup>27</sup> より正確に言えば、（36）としても概念化できる関係が含まれているということである。

語化して示すという方策を取らざるを得ないのである((34)の代換能力では、この事情自体が知識となっていることが示されている)。そのため、聞き手は手がかりと意図された対象(の候補)をそれぞれ調整し、話し手の意図(話し手自身が聞き手に提示する見え、及びその焦点化)を理解することになる。ここには手がかりとしての言語記号の調整と、意図された対象の調整がともに含まれている。いわゆる「捉え方の意味論」においては、(コミュニケーションを重視する立場であったとしても)話し手の捉え方がどのようなもので、聞き手の注意はどのように操作されるのかが関心の中心であったために、言語表現と捉え方が直接に結びついてしまい、「かのように」性が把握しづらくなるという問題があった。本稿の議論は、このような困難を乗り越え、使用事象におけるコミュニケーションの過程全体が言語表現の意味に何らかのしかたで貢献していると考える包括的意味論の端緒を開くものである。

### 参考文献

- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』東京：東京大学出版会。
- 本多啓 (2016) 「間主観性状態表現」藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ』: 254-273. 東京：開拓社。
- 池上高志 (2021) 「生命理論としての認知科学」『認知科学』28 : 198-210.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・下』東京：大修館書店。
- 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」『言語研究』88 : 1-19.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar, vol. 2: Descriptive applications*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow et al. (eds.) *Usage-based models of language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2010) How not to disagree: The emergence of structure from usage. Kasper Boye and Elisabeth Engberg-Pedersen (eds.), *Language usage and language structure*, 107-143. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.
- Langacker, Ronald W. (2016) Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. In Grzegorz Drożdż (ed.), *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, 23-53. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2020) Trees, assemblies, chains, and windows. In Tiago Timponi Torrent, Ely Edison da Silva Matos, and Natália Sather Sigiliano (eds.), *Construction grammars across borders*, 8-55. Amsterdam: John Benjamins.
- Ludlow, Peter (2014) *Living words*. New York: Oxford University Press.
- 松尾大 (2006) 「代換など」佐々木健一(監)『レトリック事典』: 103-123. 東京：大修館書店。
- 三木那由他 (2019) 『話し手の意味の心理性と公共性』東京：勁草書房。
- 森雄一 (2001) 「能力としての比喩、彩としての比喩」『成蹊国文』34 : 100-90.
- 永井均 (2016) 『存在と時間 哲学探究 1』東京：文藝春秋。

- 野矢茂樹 (2011) 『語りえぬものを語る』 東京：講談社.
- 坂原茂 (2002) 「トートロジとカテゴリー化のダイナミズム」 大堀壽夫 (編) 『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』：105-134. 東京：東京大学出版会.
- 佐藤信夫 (1986) 『意味の弾性』 東京：岩波書店.
- 佐藤信夫 (1987) 『レトリックの消息』 東京：白水社.
- Scott-Phillips, Thom (2014) *Speaking our minds*. New York: Palgrave MacMillan. [畔上耕介・石塚政行・田中太一・中澤恒子・西村義樹・山泉実 (訳) 『なぜヒトだけが言葉を話せるのか』 東京：東京大学出版会. 2021]
- 瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』 東京：海鳴社.
- 田中太一 (2020) 「知識と対象」 『東京大学言語学論集』 42：283-295.

## Why We Talk about Something as if it Were Something Else: The Cognitive Basis of Hypallage

TANAKA Taichi

t.tanaka6002@gmail.com

**Keywords:** as if-ness, hypallage, categorization, communication, cognitive linguistics

### Abstract

As part of their commitment to a conceptualist semantics, cognitive linguists argue that the meaning of a linguistic expression is not determined solely by its referent but reflects the way the speaker conceptualizes it. How does this position allow us to analyze examples like *ekimae-ni machi-no omodatta tatemono-ga atsumatte-iru* [lit. The main buildings of the town have gathered around the station]? What the speaker means by this sentence is usually not that the buildings have come together from multiple different locations, but rather that they are concentrated in a small area around the station. In other words, despite knowing full well that the buildings have been there all along, the speaker talks about them “as if” they have moved from somewhere else, and the addressee can readily understand what the speaker actually has in mind. A key component of human communication is the interlocuter’s shared knowledge that ideas a linguistic expression explicitly conveys usually represent just limited portions of what the speaker means. Drawing on the insights of Sato (1986, 1987), this paper proposes to see this characteristic of language (“as-if-ness”) as a manifestation of “hypallage as a cognitive ability”.

(たなか・たいち 武蔵野大学・東京都立大学・大阪大学・東京農工大学・成蹊大学)